

ししがしら 獅子頭

市指定有形民俗文化財

寛政12(1800)年の「一山古今日記」によれば、熊野大社は嘉吉3(1443)年に火災にあっています。その際に獅子頭は、屋外に持ち出されて焼失を免れています。

この獅子頭は運慶の作った雄獅子であり、本宮下に石櫃には湛慶作の雌獅子が納まっているとも記されています。その経緯について、後白河法皇が運慶に3体の獅子頭制作を依頼したといい、そのうちの一体が宮内熊野大社のものとされています。あとの2体は紀州熊野大社と碓氷峠熊野皇大神社にあることから「日本三熊野」と称されるゆえんにもなっています。また一説にこの獅子頭は上杉謙信の「肘かけの獅子」といわれ、陣中の際は常に座右に備えていたのが当獅子頭だったとの伝承があります。

同じ「一山古今日記」には、天正14(1586)年6月15日の御祭礼のときに本宮まで獅子を舞わしたとあるので、江戸時代以前にはすでに獅子祭が行われていたこともわかります。明治時代以前は旧暦6月15日が祭礼日でした。今は、毎年7月23日から26日までの4日間行われる実に盛大なお祭りで、その中心行事の一つが「獅子冠」です。

この獅子頭は文献記録や製作状況から室町時代のものと考えられています。傷みが激しく使用が困難になったことから、現在は平成15年に新しく作ったものを御神体として奉納しています。高さ27cm、幅40cm、奥行44cmある実物を忠実に模刻したもので、桐の木彫り、漆仕上げになっています。実物頭部には平安時代後期の白銅鏡が埋め込まれていますが、これも同一素材で複製して新しい獅子頭に埋め込んでいます。

獅子頭は黒色を基調としており、目の周辺部と口回り、耳のみに赤色を施しています。熊野信仰を背景にもつ獅子頭は黒を基調色とするものが多いことが特徴です。



南陽市文化財保護審議委員 菊地和博
平成27年7月1日号 市報なんよう掲載